
New world

光 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

New world

【Zコード】

N4012M

【作者名】

光 翔

【あらすじ】

今よりもずっと未来の話、数ある実体験型MMORPGの中で新たなタイトルが発表された。

その名も「ドリーム・アドバンス・オンライン」。略して「ドリオーン」。

その一般開放に受かった主人公、如月友継きさらぎともつぐが展開していく仮想世界の日常のお話。

ちなみに主人公は平々凡々（本人大いに自覚あり）。

幼馴染のクール系S美人（実は友達思い）や、親友の無邪気毒舌ヤ

ロー（本人は無意識）たちと一緒に成長していく。

突発的な事故とか、ありがちな大災害とかは起こらずに楽しんでいこう。…きっと。

ほのぼの仮想世界冒険モノ。

はじめ、日常（前書き）

はじめまして、光 翔と申します。

今回が初の投稿となりますので、みなさまお見知りおきを。

基本的には、つらつらとほのぼのとしたファンタジーを書いていきます。

今回、最初なので短めです。

はじまつ、日暮

「……、たつた一枚の紙切れがある。
たとえば、それは折り紙かもしれない。ただのチラシかもしれない。
でも……おれにとつては、
おれにとつては……」

「たからものオオオー……」
「……（ススス）」
「ああっ、皇ひかないでーーーー重の意味で！」
「でも、でも！」
「だつて嬉しいんだもん！生きててよかつたーーー！」

「……ねえ」
「」
「ちょっと」
「」
「……その小さな紙を持つてひとつで二マニマしてゐる如月友継16
歳小2のときのあだ」
「ごめん…あやまりますどーもすいませんでした！…だからその過
去だけはアーー！」
「…じりた？」
「じりた！」

さつきからおれに静かに制裁を加えているのは、幼馴染の日向皇。
ダークブラウンの髪を肩まで伸ばした、おれの自慢の幼馴染だ！
ちなみにクールな美人だと評判です！

「へ？おれ？」

あ、では改めて自己紹介をば。

如月友継きさかゆきともづく 16歳、高2！残念ながら平々凡々なフツーの高校生でつす。美術以外はオール3なんだよね。いいほうのだよ。ちなみに今はHRをまつてます！

「…ねえ、わつきから誰に話してんの？」

「IJの世界の神に」

「…やつぱ言お。小2のときのあだなし」「バーン…！」

うおー、びっくりした。これは…うん。

す「」に音がした扉のほうに向けると、今教室に入ってきた小柄な男子が一人。

「みんなおはよー！今日も一日がんばりー！」

と、その男子と田が合った。

すると、満面の笑みを浮かべながら「」に向かって走ってきた。

「ぐつーん…！よかつたねーマジで…！」

「ありがと！陽。おれ泣いたしなー」

「まじかーあ、わづんもおはよーー！」

「…おはよー」

こいつはおれの親友、光陽ひかりひやう

おれと同じく高2。（あ、畢もだよ？）。まあ、名前の通りの性格と思つてもらえればおつけ。

外見も、赤みがかった短髪だしませにて感じ。黒髪で特徴のないおれとは大違ひだなー。

「ぐつんもよーやくだね！ テストのときにメール一通出したさつさんは選ばれたのに1000枚出したぐつんだけはずれるし（

グサ）あとあとおじさん聞いてみたら、おれのことが書かれた自分のあて名のないメールがいっぱい届いてたらしいし（グサツ）「…ビーセおれはドジで平凡ですよー。陽の面前出せば受かると思つたんですよー」

この無邪氣毒舌ヤローが。

「ま、そんなことはおことこで。ついに3人組が揃つたんだね…！これでもーっと『ドリオン』が楽しくなるよ…！」
「2人のほうが先輩だからなー。色々とお世話になります。じゃあ、家帰つたらせっそく始めてみるよ…！」
「うん！じゃあ待つてるからね…ね、さつさん…！」
「…つん、待つてる。…わつと」
「希望系ー？」

ここからおれの新たな生活が始まるんだ…！…よね？

はじまり、日常（後書き）

感想などは常時受け付けております。
お気軽にどうぞ！

基本的には週一ぐらい更新でいきますので、少々お待ち下さい。
あ、たぶん今回だけ一人称です。
次は説明になりますー。

ドリーム・アドバンス・オンライン（前書き）

レイアウトを少しがえてこをもす。
今日は説明です。

ドリーム・アドバンス・オンライン

「ドリーム・アドバンス・オンライン」、略して「ドリオン」。コンセプトは、「夢見た自分に会える」。

これがいま話題になっている、多人数同時参加実体験型MMORPGの名前である。今までにも、このようなMMORPGは多数手がけられてきた。ドリオンも、それらのものと根底は変わらず、スキル制や職業制などは取り入れられている。だが、話題になつてゐる通り、ドリオンには従来のMMORPGにはなかつたシステムがとられている。

その最たるもののが「思考型AIによる統制」である。自ら考えて動くことのできるAIを置くことにより、運営にも予測ができないようなスキル、職業が生まれるようになつてているのだ。これは、ゲームバランスを崩さない程度に設定されており、これが最強、というものを作り出すようにはなつていらない。

また、思考型AIの暴走が危惧されていたが、このAIには、コンピューターのように与えられた事象を処理するという思考回路しか与えられておらず、こちらから働きかけない限り自ら動くことができないよう設定されているのである。

そして、AIによつてスキルや職業が新しく生まれることを、ドリオンでは「ヒラメキ」と呼んでいる。だが、ほとんどの事象（スキルや職業、武具練成方法や調合など）は、運営によつて入念に作りこまれ、反映されているため「ヒラメキ」が起きるのは「ごく」稀な確率である。

実際、現在の一般開放がなされる6ヶ月前に、運営の親族のみで開始されたテストの参加人数が5千人。その3ヶ月後、テスト参加者から紹介を受けた者のみが応募、抽選が行われ開始されたテストの参加人数が2万人。

この計2万5千人の中で、「ヒラメキ」を発現させたのは、たつ

たの3人である。内訳は、テスト参加者から2人、テスト参加者から1人。あとあとになるほど見つけづらい仕様になつていて、今回の一般開放組から出ても2人程度という予測がなされている。

テストで5千人、テストで2万人。そして、今回の一般開放では全国から応募を募り、抽選によつて7万5千人が選ばれる。つまり、現在ドリオンをプレイできる人数は、合計で10万人ということになる。

陽はおじがドリオンの関係者のため、テストからの参加。最古参のプレイヤーといえる。皐は陽の紹介を受けて テストに応募、そして当選。友継は テストに応募するも、あえなく落選（というか必然）してしまつたので、これからがドリオンの第一歩となるのだ。

仲間といつしょに強くなり、強大な敵を打ち倒す…。友継はそんな思いに胸をはずませながらその時を心待ちにしていた。

まあ、授業のたびに「ずいぶん楽しそうだね如月君。じゃあ、この問題をやってもらおうかな」というやりとりがあつたかどうかは別として。

ドリーム・アドバンス・オンライン（後書き）

んー…少し設定が甘いだろ？
感想、ご意見お待ちしております。

チュートリアル（前書き）

やつとデコオノの世界へ向かいます。
今回も説明が多いです。

チユートリアル

学校も終わり、友継は自分の部屋で、はやる気持ちを抑えて準備をしていた。

「これがドリオンの本体かあ…」

取り出したのは、2リットルのペットボトルくらいある白くて細長い四角のモノ。それに、白いコードに白いヘッドギア。余談だが、テスト参加者は赤いセットを、テスト参加者は黒いセットを使用している。一般開放は白いセットなのだ。

「これにコードをつないで…ヘッドギアにも挿して、と
友継は、ヘッドギアをもつと皿のベッドに横になる。

「

ヘッドギアをつけ、バイザーを下げる、意識はだんだん遠ざかつていった。

風が吹くたびにサラサラと音をたててゆれる少し背の高い草たち。友継が目を開けると飛び込んできたのは、広大な草原という風景だった。

非現実的な、日本にはない風景。それに目を奪われていた。

「よつひん、ドリーム・アドバンス・オンラインへ」

声が聞こえた方向に顔を向ける。するとそこには、ふんわりとした笑みを浮かべた20歳くらいのウェイトレスのような格好をした女性が立っていた。

「い、こんにちは（なんか緊張……）」

「こんにちは。わざわざあそつあつがとうござります。礼儀正しい人ですね。」

そんなに固まらないで、力を抜いて下さい、と女性はまた笑みを浮かべる。

「では、改めまして…ようこそ、ドリーム・アドバンス・オンラインへ。私は、はじまりのサポートを行つもの、ビグルと申します。このたびは、一般開放へのご当選、おめでとうございます」

そう言つて、ビグルはお辞儀をする。

「ここでは、ドリーム・アドバンス・オンライン…ドリオンの基礎となる、チュートリアルをさせていただきます。では、まずはあなたの分身となるキャラクターを作成しましょう」

そう言つと、ビグルは友継の隣まで歩いてきて、友継にも見えるように大きなウインドウを開いた。

「では、まずお名前をお願いします」

「あ、如月友継です」

「…ふふ、本名ではなく、キャラクターの名前をお願いしますね」

「（は、はずかしい…）」

友継は若干頬を赤くしながらも、すでに決めてあつた名前を伝える。

「ル、ルウでお願いします」

ビグルはそれを聞くと、何かを調べ始めた。

「ルウ、ルウ…と、はい、重複はありませんので大丈夫ですね。

では、ルウ様」

「は、はい」

いつもとは違う呼び方に少し戸惑いながらも、ルウは返事をする。「これからはずっとこの名前を使つていきますので、慣れていきましょうね。では、次に種族を決めましょうか」

ビグルはそう言つと、図の書いてあるウインドウを開く。

「ドリオンでの種族は、獣人、獣人とヒューマンのハーフ、ヒューマン、ヒューマンとエルフのハーフ、エルフの5つに分かれています。また、それぞれ、攻撃特化、攻撃重視、標準、魔法重視、魔法特化となっています。どれになさいましょうか？」

ルウは少し悩むと、口をひらく。

「ヒューマンでお願いします」

ビグルは少し疑問を持つた。「重視、の種族があるため、ヒューマンを選ぶ人はそつ多くないのだ。

「なぜヒューマンをお選びになりましたか？」

「一応、魔法をメインで使つていきたいとは思つてはいるんですが、それだけを重視すると近接戦闘がうまく行えないと思うんです。ですから、どちらにも対応でき、バランスのいいものを、と思つたんですけど…」

自然と語尾が小さくなる。この選択がいいのかどうか自信がないのだろう。

ビグルはルウをみると、真剣な顔でこう告げる。

「ルウ様の言う通りで行くのでしたら、ヒューマンは一番の選択だと思います。ですが、中途半端にならないようにお気をつけください

「…わかりました」

ビグルの言うとおり、どちらも行つところとはバランスのいい反面、平均以下になる可能性が高くなる。いかにそこをカバーしていくかが当面の課題となるだろう。

「ですが、まちがつた判断というわけではないですよ。コンセプト通り、夢見た自分を目指していきましょう」

そう言って、にっこりと笑うビグル。

「はい！がんばります！」

ルウもそう言つと、同じく笑つた。

「ふふ、頼もしいですね。では…次は容姿を決めましょうか。当ドリオンドは容姿はランダムで決定しております。よろしごでしょうか？」

「はい、大丈夫です」

「では…えい！」

その掛け声とともに、一瞬視界がぶれるが、それはすぐにおさまつた。心なしか視点が上がつたような気がする。

「確認してみてください」

そう言つと、ビグルはウインドウを鏡のようにした。
そこにいたのは、さきほどとは全く別の人物。

175？くらいの身の丈に、すらりとした体型。オーシャンブルーの髪は左右非対称になつており、片目が隠れている。短いほうの耳には、赤く輝く小さなピアス。
フツーにイケメンだった。

「…当たりですね（ボソッ）『ホン…次は戦闘のチュートリアルを行いましょうか』

どうやら当たりらしい。

チユートリアル（後書き）

なんだかとても長い文章の書ける方を尊敬し始めてきました。
意外とつらいんだなー‥。

おつと、泣きごとを言つて いる場合ではありますね。

「意見や」感想、お待ちしております。

アクアフレット

「ルウ様はさきほど魔法をメインにしていくとおっしゃっていましたが、それに変更はないですか?」

「はい。せっかくだし使っていきたいので」
そう言つてルウはうなずく。

「分かりました。当ドリオンでは、いくつかの魔法の種類がござります。初期状態で習得可能な魔法を挙げますと、火、水、風、雷、土、光、闇、鉄、です。いかがなさいますか?」

「んー…特別強い魔法とか、扱いが難しい魔法っていうのはあるんですか?」

「そのようなくくりはないに等しいですが、それぞれ長所、短所を持つっています。例えば、火属性魔法は威力こそ高いものの、発動時間、再使用規制時間が長く設定されています。同じように威力の高い魔法として、闇属性魔法がありますが、こちらは体力を差し出す条件があるなど、リスクがとても高いです」

「なるほど。…じゃあ、水属性はどうですか?」

「水属性魔法は、威力こそ低めですが、発動時間は全魔法中最速、再使用規制時間は風、光に次いで短く、使い勝手のいい魔法ですね。ただ、液体の水を液体のまま固質化しますので、イメージが難しいかもしだせません」

ちなみに、魔法を発動したあのスピードが最も早いのが雷、イメージしやすくアレンジしやすいのが土、範囲の広い魔法や、付与魔法が多いのが鉄、となっている。他にも魔法の属性は存在するが、それはまた後のお話。

「…水魔法にします。使いやすさを重視したいので」

「見た目的にもお似合いだと思いますよ。それに魔法は慣れ、の部分が大きいです。では、手を前にかまえてウインドウを出しまし

よ
う

ルウがさきほどビグルがだしたようなワインドウを思い浮かべながら手を前に突き出すと、半透明の画面が現れた。

「その中の、スキル、ところどころを触つてください」
言われたとおりの部分を触る。すると、小さな画面がもう一つ現れた。

「その中の魔法というボタンから、水魔法、水属性攻撃魔法を習得してください」

水魔法というボタンを押すと、水属性攻撃魔法、水属性補助魔法というボタンが現れる。そこから水属性攻撃魔法を選び、ほんとうに習得しますか?との問いに、はいと答える。

すると、ピコーンという音が耳に響き、水属性魔法「アクアブレット」を覚えました。という文字列が目の前に現れた。それを確認していると、またピコーンという音が耳に響いたことに気づく。

「いま、ビギナーロッドという杖をそちらに送りました。アイテム欄を開いてみてください」

アイテム欄を開くと、確かに、ビギナーロッド、加えてポーション3と表示されている。

「ポーションはサービスさせていただきますね。では次に、ビギナーロッド・右手と書いてみてください」

「ビギナーロッド・右手」

すると、右手にズシリとした重みと、木の表面のようなザラザラとした手触りが伝わってきた。そこには、自分の腕の長さほどのサイズの木製の杖が存在していた。

「ビギナーロッドはチュートリアルだけのものとなります。証拠として、杖スキルを習得しなくても装備が可能になっていますからね。これから実際に杖を使つていく場合には、習得をしてください。なお、初期に習得可能とされているスキルは、3つとなっています。レベルが上がる、アイテムを使うといったことで、習得可能な数は増えていますので安心ください。ですが、よく考えてから習得

する、といったのは必要ですね」

そこまで言い切ると、ビグルは手をくるりと一回転させる。すると、ルウの目の前に赤いカーソルが現れ、同時に、エネミーとの戦闘を開始します。という情報も表示される。

「あれば、チコートリアルだけのエネミーで『かかしさん』といいます」

確かに、目の前に現れたのはかかしのような物体。普通のモノと違うといえば、少しだけ宙に浮いていることだろうか。

「ではルウ様。水でできた銃弾が相手に向かって飛んでいくところをイメージしながら、スキルアーツ・アクアブレットと唱えてみてください」

イメージする。

自分の頭上に浮かぶ4つの水塊、それが4つの銃弾へと姿を変え
…一気に敵へと向かう！

「スキルアーツ・アクアブレット！」

その声とともに発射された銃弾の、1発は横をすり抜けていき、1発は届く前に消えてしまう。だが、残りの2発はその勢いのまま相手に命中する。当たった瞬間かかしさんはひるむが、それでルウを敵と認識したようで、とつてつけたような感情のこもつていない目でルウを見つめている。

と、ビグルが口を開く。

「はじめはコントロールが難しいものです。ですが、初めてで4発もイメージし、固質化させることができていたのは驚きました。1発にしか集中できない方が多いんですよ」

「ありがとうございます。昔から、イメージは得意なんですね」
前にも書いたとおり友継は、美術のみ5、あとはオール3というなんともいえない成績の持ち主である。美術も、絵がうまいからとかの評価ではなく、発想力という部分での評価が大きい。そこは、自分自身が把握している唯一の特技なのである。

「魔法はイメージする力が大切ですから、きっと慣れれば良い魔

法使いになれますよ。…では、エネミーは待ってくれないようすで
ので続きに移りましょう。相手が攻撃をしてきます。試しに受け
みてください

ビグルが言い切ると同時に、かかしさんがあき始めた。ピヨ ピ
ツ、ピヨ ロツとした飛び跳ねる動きは、なんともいえぬ愛嬌がある
ように感じる。なんだか、頑張れ！と言いたくなる、そんな感じで
あつた。

ルウもそこは同じなようで、迫りくるかかしさんをじっと見つめ
ている。

「（なんか、○ウルっぽい）」

そう感想を頭の中で述べているときだつた。

左右に大きく跳ねながらこちらに迫っていたかかしさんが、次の
瞬間こちらに向かつて速度を上げて飛んできたのである。

「うわっ！」

ドン！！

ルウはその場で尻もちをついてしまつ。同時に、20あったHP
バーが17まで下がっていく。

「び、びっくりした…いきなり…」

それを見越したかのように、ビグルがルウに語り始めた。

「このように、敵もパターン通りに攻撃をしてくるのではなく、
そのときそのときによって攻撃の方法や速度などを変えてきます。
そして、ただいま受けさせていただいたように、痛みはそう伴いません
が、威力に合わせた衝撃が襲ってきます。大事なことですからよく
覚えておいて下さい。」

それを聞いて、ルウは今受けとおいて良かったと感じた。思つて
いたよりも衝撃が大きかったので、チュートリアル中でなければ混
乱してしまつと感じたのである。そうすれば、その後の戦闘に支障
をきたす。

「では、このあとは自由に戦つてみてください。HPバーとMP
バーを意識しながら、回復も忘れないようにお気をつけて

そういうと、ビグルはルウの後方3メートルほどに移動はじめ
る。

ルウはその言葉通り、一旦自分のステータスを確認すると、意識
をしつかりとつくり、かかしさんを見つめる。

「（これがドリオンの初戦か…。よーし、やつてやるー。）」

「スキルアーツ・アクアブレット…！」

アクアフレット（後書き）

次で「ユートリアルは終了」です。
冒険が始まっています。

ポイント

結果として、かかしさんは倒すことができた。そこまでの過程として、ポーションは一つ使われ、HPは20から8へ、MPは10から0になっている。

ポーションの回復量約40パーセント、ビグルの助言の通りに自らのステータスをよく確認しながら戦つたからこそ勝つことができたと言つていー。

ちなみに、最終的にはビギナーロックで殴つて倒したというのはヒミツである。

「（ふう…どうにか倒せたけど意外と苦労するな）」

現在、ルウが使える魔法はアクアブレットのみである。そして、それは1発2のMPを消費する。つまり、現在の実力では5発が限度となる。だが、5発もあればすぐに倒せるのではないだろうか？

そう考える人もいることだろう。

だが、これは体験型MMORPGである。通常のゲームでの戦闘とは似て非なるものである。そこには、人間の持ちえる感情、つまりここでは恐怖が適応される。

ルウは戦闘の中で、相手の攻撃に焦り全弾を外してしまつこともあつた。今までやつてきたゲームとの違いを、文字通り体で受け止めたことになつた。

「おつかれさまでした」

そう言つてビグルが近づいてくる。

「HPを確認しながら戦つていたのはとてもいいですね。ですが、魔法は無駄打ちも多かつたですね。戦つてみてどうでしたか？」

「痛みがないのは少し安心でしたけど、自分にかかる衝撃を恐れて焦った部分がありましたね。魔法は…まだ難しいなあ」
そういうて苦笑するルウ。

それを見て、ビグルが口を開いた。

「そうですね。ですが、そこまで考えられるのはいいことですよ。では…そんなあなたに免じて、少しサービスいたしましょう」

そう言つと、ビグルは高く空に向かつて腕を掲げる。

同時に耳に響く警告音と、田の前に現れる赤いカーソル、エネミーだ。

「また！？」

とつさにルウは杖をかまえる。

だが、ビグルが数歩前に出て手をかざしルウを制す。

「これは私が発生させたエネミーです。少し、見ていてくださいね」

ビグルはそう言つと、エネミー、かかしさんを見つめながら口を開く。

「ルウさんがさきほどから使つている、水属性攻撃魔法アクアブルットにはこのような使い方もあるんですよ。では…現在のルウさんの実力に準拠しながらやつてみましょうか」

そう言って、頭上に4つの水塊を出現させる。

「全弾を一気に発射させるということは、相手のスキを狙えば大きなダメージを与えられます。ですが、それは同時に自らの攻撃方法を失うことと同義です」

そういうと、その中の一つを発射させてかかしさんへと命中させた。

それでこちらの攻撃ターンが終わつたということなのだろうが、

かかしさんが突進してくる。

「また、ターンというものの存在はあります、コマンドで動くRPGのように明確には規定されていません。ですから、相手の攻撃でこちらが反撃することも可能です。それはその逆もありえるといつこともあらわしていますけど、ね」

そういうてビグルは苦笑する。

その間にも戦闘は進んでおり、さきほどこちらに向かつて突進してきたかかしさんの攻撃は、1発の水塊を当てるところで止まり、ひるんだところに残っていた2発の弾を命中させる。そのあと、かかしさんの体当たりをよけると、また4つの弾を出現させる。

「では、終わらせますね」

そういうと、ビグルは1発の弾を撃つ。それはかかしさんに避けられるが、時間差で撃っていたもう1発が命中、ひるんだところに残りの2発をぶつけるとかかしさんは倒れ、粒子とともに消えていった。

「今のように、相手をひるませてからの射撃というのも可能です。ドリオンの世界の攻撃は、一工夫を加えることで同じ武器、魔法でも利用法が変わってきます。まあ敵にもありますけどね。かかさんは練習相手なので、かなり弱く設定されていますから」

では、これでチユートリアルを終わりますとこうビグルの声が響き終わるとともに

パッパラー

という音が鳴った。

「ステータス画面を開いてみてください」

言われたとおりに画面を開く。すると、一番上のところに、レベルアップ!という文字が点滅しているのが目に入ってきた。

「チコートリアルによる経験値の付与と、さきほどの戦闘によってレベルが上がったのですね。では、その部分に触れてみてください」

言われたとおりの場所に触ると、ステータスポイント + 3、スキルポイント + 5という表示がなされている。

「レベルが上がるごとに、ステータスポイントが 3 ポイント、スキルポイントを 3、4、5 ポイントのいずれか入手することができます。非常に大切なことですので、よく覚えておいてください」

ステータスポイントの欄に触ると、あと 3 ポイント使うことができるという表示と共に、上から、筋力、体力、魔法攻撃、魔法防御、命中、素早さ、魅力という欄に 2 と表示されている。

「（魔法職にするつもりだから、魔法攻撃は重要だよな……あとは体力か、素早さ、か？）」

とりあえず魔法攻撃に 1 ポイントをふると、また悩みはじめる。

「（でも筋力も必要っちゃ必要……ん？ 魅力ってなんだ）」
と、ルウはビグルに向き直る。

「魅力ってなんですか？」

「魅力は、いまはそう重要ではありません。パーティプレイの際に、連携を行う発生率を高めるというステータスです」

ドリオンでは、レベル 10 までパーティを組むことができない。その理由は、レベル 10 まではレベルアップがたやすいことともうひとつ、パーティに入つて何もせず、レベルだけを上げてもらう

とこうことを少なくするためである。

初めての「ひに自ら戦い、高める樂しさを覚えておけば、未然に防ぐことができるであらう」という運営からの配慮である。

「（となると…「ふふ、これでいいかな）」

ルウは考えた末、体力と素早さに1ポイントを振りわける。

「ステータスを上げるといつことは、これからをおおいに左右するものです。よく考えて決めていきましょう。では、次はスキルポイントですね」

スキルポイントの欄に触れると、表示されたのは水属性攻撃魔法のみだった。

「習得しているスキルが表示されますので、今は一つだけですね。あとで習得してみてください。では、今回は全てふってみましょう

それにあわせて、水属性攻撃魔法に5ポイントを振る。すると、ピコーンという音が鳴り、「splash」を覚えました、と表示された。

「スキルポイントがある一定の値になると、それに合わせて様々なスキルを覚えていきます。基本的には高い値で覚えるスキルのほうが強力ですが、使うMPが多かつたりと、ハイリスクハイリターンですね」

そう言つてニコッと笑うビグル。

「では、これでここでやるべき」とは全て終了となります。なにか質問はありますでしょうか？」

ルウは少し考へると、ビグルに口を開く。

「デスペナルティとかあるんですか?」

つまり、HPが全てなくなってしまったときのリスクはあるのか、ということである。

「はい、存在します。具体的には、時間が経つと最後に立ち寄った町に帰されること、経験値の多少の減少、所持金の半分がなくなること、装備品のランダムドロップ、ですね。このように設定されていますから、できるだけ死亡しないようお願いします」

他に聞きたいことはありますか、と尋ねるビグル。

「んー…他にはないですかね」

そう言って苦笑するルウ。

「これからおこおい分かつていくはずですから大丈夫ですよ。では、最後に…」

そう言って両腕を空にかざし、視線を上げるビグル。

「大地を守護する精霊たちよ…この者に祝福をあたえたまえ」

ビグルが言い切ると、ルウの周りを光が舞い、やがて体に吸い込まれていった。

「みなさんに贈っている祝福です。具体的には、スキルポイントの贈りとスキル習得数の増加、ですね。ここを出た後に確認してみてください」

では、お送りいたしましょう、と言いながらビグルが手を前にかざすと、草原の一角に扉が出現した。

「これを通って行けば、待ちに待つたドリオンが始まります。さあ、準備はいいですか？」

「はい！なんでも来いです！」

ルウは自らの手を胸に当て、自信たっぷりに告げる。

「その意気です。これから旅があなた様にとつて幸多きものに

なつますよつに。では…こつてらひしゃい！」

「いろいろありがとうございましたー！いつできまー！」

ルウが別れを惜しみながらも扉を開く。すると、扉の中からわれる柔らかな淡い光が体を包み込み始めた。

同時に意識が遠くなつていぐ。

「（これからおれの物語が始まるんだーー）」

ルウは、ワクワクをいっぱいに抱えながら、光に身を任せていった。

ちなみに、扉が閉まる寸前で「あー疲れた」という声が聞こえてきたのは空耳である。

ポイント（後書き）

さあ、やっと物語が動き出します。
次は、初めての町と初心者の宿命です。

感想やご意見、お待ちしています。

ファースト・ステップ

はじまりの町、「ファースト・ステップ」。チューートリアルを終えたプレイヤーがまず訪れるのがこの町である。

西洋的な作りの街並み、一軒一軒がレンガで作られており、メインストリートは石畳で整備されている。現代日本では見ることのできない光景、改めてここがゲームの中であると思い出せられる光景である。

建物の中でひときわ目立つ建物がある。他の建物とは大きさも作りも見るからに違うのである。他の町とはずいぶんと違うのだが、これはこの町の宿屋である。

ここに宿屋は、チューートリアルステージから転送されてきたプレイヤーを受け止める施設を兼ねている。だからこそ、ある程度の規模が必要にならてくるのである。

いま、また一人チューートリアルを終えたプレイヤーが光とともに転送されてこようとしている。

「…おお」

オーシャンブルーのウルフヘアに、赤く輝く片耳ピアス、ルウであった。

ここに来たプレイヤーは、まず周りを見てさきほどの草原の風景と照らし合わせる者がほとんどである。ルウも同じように、田を丸くしてキヨロキヨロしている。

「よウヒナ。はじまりの町、ファースト・ステップへ」

そう言つて、1人の宿屋の人間がルウのもとに近づいていく。

「宿の出口まで」案内しますので、ついてきてください」

「あ、はい」

言われるままに、ルウはその後をついていく。

「道中こ、この町のことを説明していきますね」

- - - -

「ファースト・ステップ」。この町は文字通り、「はじめの一歩」を踏み出す町である。

外観は先ほどの記述の通り、中世ヨーロッパのような雰囲気となつていて。

これから訪れるであろう町と基本的には同じつつあるが、NPCイヤーキャラクターが多数存在しているという違いがある。

彼らは、システムの通りの受け答えをするため、町の看板的役割を同時になしている。

宿屋の職員たちの多くも、NPCである。

また、プレイヤーたちは、任意で自ら露店を開くことが可能である。よく行っているのは、主に鍛治師や調薬師などの生産系プレ

イヤーである。自分で作った武具や薬を売る」ともあるが、作成に必要な素材の買い取りを行つてある。

「」のように、全ての都市で露店はみられるのだが、「ファースト・ステップ」には見かけることがあまりない。

これは、生産スキルを習得するプレイヤーは多くながらも、はじめはうまく生産できないという事象による。

例えば、鍛冶スキルを習得して、鉱石を集めて武具の生産を行つたとする。すると、はじめのうちは攻撃力が0になつてしまつ。これは、鍛冶スキルの熟練度10で覚えることのできる、「刃付け：攻撃力増加」を使用していないからである。

また、「刃付け」を習得したとしても、かけだしの鍛冶師が付加できる攻撃力はたかが知れている。それに、鉱石を使用していることで費用はそれなりにかかるわけで売値も高くなつてしまつ。

攻撃力が低くて、それなりに高価な武具と、少しだけ能力があつて安価な武器。プレイヤーたちがどちらかを選ぶかは、一目瞭然であろう。

同じことは、調薬や調理にも言えるのである。であれば、このようないはじめの町で生産を行うよりもある程度進んでいる町で行ったほうが、学ぶことも可能になるし自らを高めることもできるはずだ。

そういう言つてゐる間に、ルウ達は宿屋の出口に着いたようである。

「」が出口となります。大まかに言いまして、ここから右手に向かいますとモンスターたちの住んでいるフィールドが、左手に向

かいまと武器屋や道具屋のある商店街に出ます。はじめは商店街のほうで装備を整えてからフィールドに向かうことをお勧めします」

ステータスウインドウを開いてみてください、といふ声とともにルウはワインドウを開く。

「そこを見ますとはじめは0だつた所持金が1000になつてゐると思います。こちらはチュートリアルを終えた報酬でもありますし、わが町の期待を込めたプレゼントでもあります。これからあなた方は夢見た自分を目指していくわけですが、その道程のサポートにでもなればと思つてこます」

では、私は戻りますね、と言つて宿屋の職員は戻つて行つてしまつた。

ルウはその背中に向かつてありがと「いやこました」と言つた後に、その場で考え始める。

「（じやあ、さつきの人、が教えてくれた通りまづは商店街に行つてみようかな）」

そう考えてルウは「ファースト・ステップ」での初日を過ごすことをなつた。

- - - - -

商店街に向かう途中、ルウは西洋風の噴水のある公園を見つけ、そこで立ち止まる。

「（うわあ…地元では見たこともないような立派な公園だなあ）」

噴水の近くのベンチに吸い寄せられるようにしてルウは腰かけた。

「（…そろいえば、ビグルさんがスキルを習得するようになつていたなあ）」

そう考えるとルウは田の前にウインドウを開いた。

先ほどは時間があまりなかつたので詳しく見ることができなかつたが、自分の所有スキルポイントが10となつていていたことに気付いた。

これが、ビグルの言つていた祝福である。実際にスキルポイントは10増えていたしスキル習得数も一つ増えているようだった。

「（じゃあ、スキルを習得してみよつかなあ…）」

ルウはスキル習得画面に切り替え、そこに田を向ける。

今現在、ルウが習得しているのは水属性攻撃魔法のみである。ルウは近接戦闘でも活躍できる魔法使いを目指しているため、ある程度自分の中で習得したいスキルを決めていた。

「（水属性攻撃魔法を習得しているから、相性がいいのは水属性補助魔法だろう。それに、魔法使いだったら使える武器は…あまり大きいものだと使い勝手も悪いし、魔法にも集中できないよな…）」

まず、ルウは水属性補助魔法を習得する。それと同時に、ピローンという音が鳴り、「水幕^{スマック}を覚えました」という表示がなされる。

「（武器の規模が小さい戦闘方法だつたら、何があるかな…格闘、ナイフ、…ナイフだつたら後々投げる攻撃も覚えるだろうし、中距離から攻撃できれば魔法使いの防御の薄さもカバーできるかな）」

格闘みたいに接近戦を挑む用のスキルは向かないだろしね、と頭の中で付け加えて、ルウはナイフのスキルを習得する。

「（後は、さらに防御の薄さをカバーするなら回避を優先すべきかな。…よし、決めた！）」

その声とともにルウは風属性補助魔法を習得する。同時に、「ナイフスキル：スナップナイフ、風属性補助魔法：ファストタップを覚えました」という表示がなされた。

「（スキルポイントも振り分けておこうかな）」

そう言つとルウは、ナイフに4ポイント、風属性補助魔法に4ポイント、水属性補助魔法に2ポイントを振り分ける。

同時に「スピードステップ、アヴォイステップを覚えました」という表示がなされた。

「ふう、とりあえずこんなもんかな」

ルウは満足そうに白らつなづくのであった。

「」の選択が凸と出るか凹と出るか、それはまだ誰にも分からぬ。

ファースト・ステップ（後書き）

少し整理しておきましょうか。

現在の、ルウの習得スキル

水属性攻撃魔法

- ・アクアブレット
- ・スプラッシュ

水属性補助魔法

- ・水幕

ナイフ

- ・スナップナイフ
- ・スピードステップ

風属性補助魔法

- ・ファストタップ
- ・アヴォイステップ

となっています。

いきなり出てきましたが、みなさん整理できましたかね（汗）

いまのところ分かっている攻撃はアクアブレットだけですね。

これからその効果も明かしていきますよー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4012m/>

New world

2010年10月9日08時22分発行